

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21610008

研究課題名（和文） 「いえ」型保育所における「きょうだい保育」の実践的・実証的研究

研究課題名（英文） The Forming Children's Group In 'Home' Style Nurseries
Introducing Multi-aged Grouping Child Care

研究代表者

櫻井 康宏 (SAKURAI YASUHIRO)

福井大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：40020234

研究成果の概要（和文）：子どもが1日の大半を過ごす保育施設は単なる通所施設ではなく、子どもの発達を保障する家庭的要素を軸とした生活施設であるべきである。現代の一般的住宅と同じように「居間」「寝室」「食堂」などの各居室によって構成された「いえ型保育空間」において、1～5歳児混合の「きょうだい保育」を実施する全国初の保育園を対象に、より豊かな子どもの生活環境を提案するべく、保育室内での調理員常駐・調理実験を試験的に行い、前後の子どもの生活実態の把握を行った。その結果、保育室内の居室利用は、概ね「寝室」>「居間」≧「食堂」>「ユーティリティ」の順に多く、園児が体験する集団の7割以上が「異年齢集団」であり、特に、食事・着替え・午睡などの生活にかかわる行為での異年齢の関わりが顕著であった。また、実験による子どもの居場所及び集団構成に大きな変化は見られなかったが、個人追跡調査の結果では、子どもが調理員のもとへ自分のタイミングで向かう姿が多く見られ、保育士との関わり方とは違う新たな関係づくりが見られた。

研究成果の概要（英文）：This study is aimed to perceive the forming children's group in multi-aged grouping care facilities. We investigated by analyzing the summarized observation of daily children's behavior. The children stayed in a day nursery that resembled a family home with a comfortable day-room, a dining-room with an open-kitchen, and bedroom. Living-time (meal, sleeping, and program-time) was shown to be the best chance to cultivate mutual understandings in a mix-aged and development community. And during play-time, same-age groups and small mix-aged group communities were shown.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	3,900,000	1,170,000	5,070,000

研究分野：子ども学（子ども環境学）

科研費の分科・細目：子ども学（子ども環境学）

キーワード：社会福祉関係、都市計画・建築計画、人間生活環境、保育

1. 研究開始当初の背景

少子化傾向の続く現代において、家族の分解、就業形態の多様化、地域の教育力の低下等を背景に「保育需要（育児の社会化ニーズ）」は高まりをみせている。初等教育から高等教育にいたる全ての課程で「教育改革」が求められる中、「就学前教育（乳幼児期教育）」を見直す必要性も高まっている。これに加え、財政問題を背景にした「幼保一元化」の議論とも関連して、ソフト・ハードの両面で保育施設（幼稚園・保育所）の見直しと改善が緊急に求められている。

先行研究をみると、建築学（ハード）における保育所に関する研究の多くは、佐藤ら（「園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察～園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究その1～」佐藤将之他、日本建築学会計画系論文集第562号）のように、空間と保育、子どもの行動（特に遊び）の関係について論じられるのが一般的である。子どもの発達について空間的特質（特に食環境）と保育方針の関係を研究するものはほとんどみられず、子どもの行動や育つ環境・空間から子どもの発達を論ずるものもあるが、「縦割り保育（特に1～5歳児混合の保育）」における子どもの発達に着目した研究論文は皆無に等しい（「保育施設空間に関する研究・その1－保育方法と保育空間の関わり－」小川信子他 日本建築学会大会学術講演梗概集1996）。また教育、家政、保育学等（ソフト）においては子どもの発達と保育の関係についての調査、実践の紹介は行われているが、平面計画と発達の関係性について建築的視点から評価しようとするものが少ない（「縦割り保育の幼稚園における幼児の相互交渉と〈心の理解〉の発達」子安増生他 日本教育心理学会総会発表論文集）。

2. 研究の目的

本研究は、学外の共同研究者（共同実践者）と共に、「縦割り保育（1～5歳児）」「保育室における食事づくり」というソフトの仕掛けと「いえ型保育空間」というハードの仕掛けを導入して「きょうだい保育」を実践する全国初の保育園において、これらの仕掛けが子どもたちの生活と発達に与える効果を実証的に確認しようとする実践的研究（≒研究の実践）であり、当該施設の保育者・設計者および現場と関わりをもつ大学院生が参画する共同研究（共同実践）である。

K保育園が目指す「きょうだい保育」は、子どもたちの安心感の基礎となる「いえ（おうち）」という保育空間（ハード）の中で、異年令集団による「縦割り保育（1～5歳児）」に加えて、「食＝生きる力」という仮説に基づく「保育室（おうち）での食事づくり」という実践（ソフト）を軸に展開されている。

K保育園の平面は、0歳児保育室1軒と、1～5歳児約25名で1家族（縦割り集団）の保育室が3軒という合計4軒の「保育室（おうち）」と遊戯室・屋外テラスによって構成されている。各保育室（おうち）には「対面式キッチンをもつ食事室」「寝室」「居間」「トイレ」があり、食寝分離の「田の字型」の平面構成となっている。

本研究では、このようなハードとソフトをもつK保育園における子どもたちの生活実態を把握し、主として発達の働きかけの契機となる「集団形成」の実態を明らかにすることによって、「きょうだい保育」を支える「保育空間（おうち）」の有効性を検証しようとするものである。

また、現段階の保育政策の現状（制度的に保障される予算および職員体制の現状）においては、「保育室（おうち）」に調理員を常時配置することが極めて困難な状況であったため、調理員1名を新たに雇用（6ヶ月）し、それによる子どもたちの生活変化（動線の変化、集団形成の変化）を明らかにすることを目的としている。なお、既にK保育園において平成19年度分までの総括資料分析（食事時間での異年齢間の関わりが増えることによって遊び時間での異年齢間の良い関わりが増えることを確認）確認している。

3. 研究の方法

本研究の主な方法は、K保育園における子どもたちの生活実態とその変化を把握するための観察調査（目視調査）と、保育者・調理員・保護者の意識の実態とその変化を把握するためのアンケート調査から構成される。また、本研究はK保育園関係者との共同研究（共同実践）であり、調査の企画・実施・分析・評価などの全ての側面において関係者との「討議・ワークショップ形式」を採用した。通年スケジュールと調査方法は、以下の通りである。

（1）平成21年度

①保育者及び設計者との討議

②2クラスを対象に行動観察調査

- ・居場所調査：2クラスの全園児の居場所を5分毎（9時～16時）に図面上にプロット→各年齢別の居室利用実態と集団形態（一人、異年齢、同年齢、規模など）の把握

- ・個人行動観察調査：各クラス1～5歳児1名ずつ及び調理員を対象に保育室内での移動軌跡を記入→より精緻な集団形態の把握と各室への移動経路の把握

③1クラスを対象に調理員常駐実験開始

- ・保育室内調理員常駐実験：Tpクラスを対象に6ヵ月間の調理員常駐（9時～16時）・保育室内調理の実施

(2) 平成22年度

- ①保育者及び設計者との討議
- ②1クラスを対象に調理員常駐実験継続
- ③実験中の子どもの行動観察調査
 - ・実験前(11時から1時間昼食の温め、配膳のみを保育室内で行う)・開始直後(2週間)・3か月後、5か月後、半年後の5過程の中での調理員と子どもの集団形成、各室への移動経路の変化を把握
- ④保護者・保育者へのアンケート調査
- ④行動観察調査等の分析

(3) 平成23年度

- ①保育者及び設計者との討議
- ②実験前後の行動観察調査の比較分析
- ③論文執筆
- ④研究報告

4. 研究成果

(1) 保育室内での子どもの居場所と集団構成

各室の利用状況は、各クラスの保育内容や方針によって多少の違いは見られるものの、概ね「寝室」40%弱>「その他(保育室外)」20%≧「居間」20%弱≧「食堂」20%弱>「ユーティリティ」8%であり、低年齢ほど「寝室」「ユーティリティ」、高年齢ほど「居間」「食堂」での滞在が多い。一日を通して、各子どもが「異年齢集団」に属する割合は7割を超えており、特に「寝室」「食堂」で形成されていることがわかった。食事や着替えなどの生活時間と自由遊び時間では、生活時間での「異年齢集団」形成が多いのに対し、「同年齢集団」は自由遊び時に比較的多く形成されており、特に5歳児は「同年齢」で遊ぶ機会が多い。「異年齢集団」の年齢構成は、生活時間時に多様な年齢で構成され、遊び時間では1歳違いの2階層年齢での集団構成が多くみられる。

(2) 調理員常駐調理実験による変化

調理員常駐実験による子どもの集団形成や居場所は、実験半年後>実験開始直後>実験1年前の順に「寝室」「食堂」利用が高く、異年齢集団形成割合も多かったが、実験対象外のKsクラスとの比較から、1月と6月の保育方法の違いによる5歳児の午睡の有無に起因すると考えられる。しかし、活動の合間に台所へ立ち寄る子どもの増加や調理員を含めた集団は、「3か月後」を境に増加しており、個人追跡調査から調理員との関わり方に個人差が認められた。また、調理員自身の行動も食堂・台所を拠点に徐々に「居間」「寝室」へと広がり、「居間」「寝室」間の移動の増加や遊び時間での集団参加も見られるようになった。子どもの行動例をみると、活動日によって行動パターンは異なるもの

の、常に台所で作業を行う調理員のもとへ、子ども個人が自分のタイミングで向かう場面が多くみられるようになった。アンケート調査、ワークショップでは、保育士から、調理員常駐による調理時の保育室内の匂い、音、暖かさなどが、子どもに安心感を与え、生きる力をはぐくむだけでなく、職員の安心やストレス軽減にもつながるなど、肯定的意見が多く出された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

1. 栗原知子, 櫻井康宏、「きょうだい保育」を導入した保育園における子どもの発達に関する調査研究(3)―行為別にみる集団構成と居室利用の実態―、日本建築学会学術講演梗概集建築計画I pp599-600 (2010・9) 査読無
2. 松村正希, 栗原知子、「保育」とは何か―「生きる力」をはぐくむ視点を大切にした保育環境―、第42回全国保育園研究集会要綱 pp167-168 (2010・8) 査読無
3. 栗原知子, 櫻井康宏、「きょうだい保育」を導入した保育園における子どもの発達に関する調査研究(2)「いえ」型保育空間における園児の居室利用実態について、日本建築学会北陸支部研究報告集第53号pp623-626 (2010・7) 査読無
4. 栗原知子、「きょうだい保育」を導入した保育園における子どもの発達に関する調査研究―「いえ」型保育空間における園児の居室利用実態について―、こども環境学研究(2010・4) 査読無

[学会発表] (計7件)

1. 栗原知子、「子どもの空間認知と集団形成の特性に関する調査研究、福井大学教育内容・教材開発研究会、招待講演、福井県福井市(2011・7・22)
2. 栗原知子、「The Effects of Play of Children in Nurseries Introducing Multi-aged Grouping Child Care」、18th International Play Association World Conference 2011 p134, イギリス(2011・7・7)
3. 櫻井康宏、栗原知子、「転換期における子どもと大人の関係づくり」、2011年全国子供会育成中央会議・研究大会、招待講演、福井県福井市(2011・2・12)
4. 栗原知子, 櫻井康宏、「きょうだい保育」を導入した保育園における子どもの発達に関する調査研究(3)―行為別にみる集団構成と居室利用の実態―、日本建

- 築学会大会、富山県富山市 (2010・9・11)
5. 松村正希, 栗原知子、「「保育」とは何か - 「生きる力」をはぐくむ視点を大切にした保育環境-」、第42回全国保育団体研究集会、岩手県盛岡市 (2010・8・8)
 6. 栗原知子, 櫻井康宏、「きょうだい保育」を導入した保育園における子どもの発達に関する調査研究 (2) 「いえ」型保育空間における園児の居室利用実態について、日本建築学会北陸支部大会、新潟県長岡市 (2010・7・18)
 7. 栗原知子、「きょうだい保育」を導入した保育園における子どもの発達に関する調査研究 - 「いえ」型保育空間における園児の居室利用実態について -、こども環境学会大会、広島県広島市 (2010・4・24)

〔図書〕 (計1件)

1. 栗原 知子、発行所：新建築家技術者集団 印刷：(株) きかんし、建築とまどづくり 1月号、2011年

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

櫻井 康宏 (SAKURAI YASUHIRO)
福井大学・大学院工学研究科・教授
研究者番号：40020234

※研究協力者

小山 逸子 (KOYAMA ITSUKO)
K保育園・園長
松村 正希 (MATSUMURA MASAKI)
株式会社莫設計同人・代表取締役
栗原 知子 (AWAHARA TOMOKO)
福井大学大学院工学研究科・博士後期課程